はじめに

戦争や虐殺の経験を語り継いでいくことは、たしかに同じ「あやまち」を繰り返さないために必要かもしれない。しかし、このような言明や実践に陥穽はないのだろうか。本論では、「犠牲者ナショナリズム（victimhood nationalism）」（Lim, 2007）を取り上げ、経験の継承について考察する。

犠牲者ナショナリズムとは国家や民族の被害体験あるいはトラウマ体験を核とするナショナリズムの一形態である。それは、過去の体験によって被害を受けた人びとの加害者への敵対心を煽り、民族、地域集団などの統合を図ろうとするもので、文化の特異性や過去の英雄を強調するナショナリズムとは区別される。マイノリティや長く植民地支配下にあった新興の独立国家においては、こうしたトラウマ体験の流用が顕著である。犠牲者ナショナリズムにおいて求められているのは、かつての敵に対する憎悪の炎を消さないことである。このため犠牲者ナショナリズムにあっては、戦争や民族浄化といった出来事が、他者を排除するための、したがってさらなる戦争や民族浄化、贖罪的な暴力（redemptive violence）を正当化するような考えや動きを再生産してしまうことになる。犠牲者ナショナリズムにおいて、複雑な背景や交錯する敵対関係は単純化され、過去の経験はわたしたち（正しい人）と彼ら（邪悪な人）という二項対立で説明されることになる。[1] 加えて、過去の経験の継承は、心理的にも社会的にもきわめて複雑な実践であるが、この点も犠牲者ナショナリズムにおいては十分に考慮されているとは言えない。以下では、複雑さの例として「トラウマの二次受傷（secondary traumatization）」に言及しておきたい。

トラウマの二次受傷とは、直接トラウマを引き起こすような経験に触れていなくても、語りや遺品などを通じて、ＰＴＳＤ（Post Traumatic Stress Disorder、心的外傷後ストレス障害）と一般に診断されるような心身への異常が生じることを示す。[2] 忘れ去りたい当時の体験を想起し語ること自体きわめて勇気のある行為であると同時に、それを聴いて継承しようという行為もまた危険に満ちたものなのである。わたしは、継承において二次受傷をまったく回避することは不可能であるし、共感や継承はこうした受傷をある程度引き受ける、つまりトラウマを共有することを意味すると考えている（田中・松嶋、二〇一九）。わたしたちに求められているのは、二次受傷の危険をできるだけ避けながらも他者の声を聴くという実践であり、それを可能にする場所である。

本論では、第二次世界大戦当時のドイツの占領地域におけるユダヤ人虐殺という歴史的経験の継承問題を取り上げる。具体的には、ポーランドの南西に位置するアウシュヴィッツにおけるホロコースト（ショア、ナチス・ドイツによるユダヤ人の大虐殺）をめぐる継承の取り組みを考察する。まず、調査地であるアウシュヴィッツについて紹介し、つぎに犠牲者ナショナリズムの例としてイスラエルの教育に言及する。そのあと、アウシュヴィッツを拠点とする「対話と祈りセンター」の試みを検討する。

二〇一四年秋と二〇一五年夏と冬にアウシュヴィッツに二〜三週間滞在し、関係者にインタビューを行った。[3] また、アウシュヴィッツで開催された催しやサマー・アカデミーに参加した。本論はその際の調査に基づいている。

一、……灰が一面に降りそそいだ町、アウシュヴィッツ

概　略

アウシュヴィッツ（Auschwitz、ポーランド名オシフィエンチム、Oświęcim）はポーランドの南西部に位置する町である。観光地としても有名な古都、クラクフ（Kraków）から南西におよそ五〇キロ、人口はおよそ三万八〇〇〇人（二〇一八年末）、広さは三〇平方キロメートルである。城と教会、広場があり、典型的な

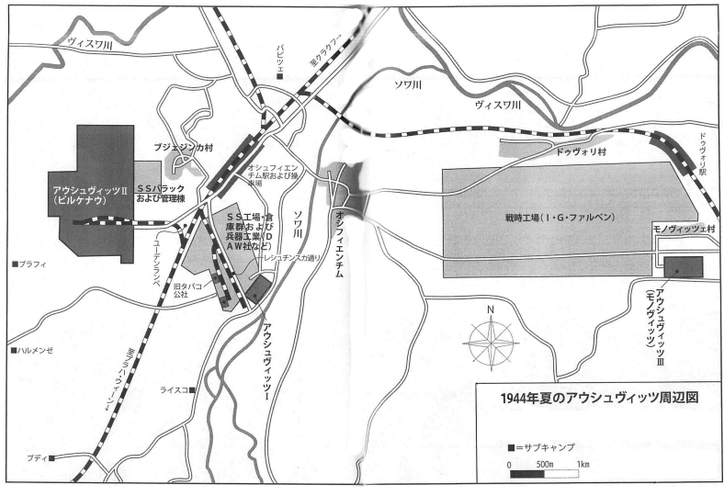
ヨーロッパの町である（図1、地図1）。しかし、町の南西およそ五キロに位置していた収容所がこの町を国際的に著名にさせることになった。

ドイツは一九三九年九月にポーランドに侵攻し、翌年に相次いでふたつの収容所（アウシュヴィッツとビルケナウ）をアウシュヴィッツに建設した。当時のアウシュヴィッツは人口一万二〇〇〇人で、半分以上がユダヤ人であった。五月にできたアウシュヴィッツ第一収容所には一万二〇〇〇～二万人、そこからおよそ北西に三キロ離れたビルケナウ（Birkenau、ポーランド名ブジェジンカ、Brzezinka）に一〇月に完成したビルケナウ（アウシュヴィッツ第二収容所）には、多いときで九万人が収容されていた。第一収容所は、もともとポーランド陸軍の兵舎であったが、ドイツによる占領後はソビエト兵の捕虜やポーランド人の政治犯、そしてポーランド国内だけでなくヨーロッパ各地から送られてくるユダヤ人が収容されることになる。これらは、一般にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所（独：Das Konzentrationslager Auschwitz-Birkenau あるいは KL Auschwitz-Birkenau）と一括され、現在、両者とも国立アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館（The Auschwitz-Birkenau State Museum）となって、政府の管理下にある。

町の五キロほど東側には、一九四二年一〇月に建設されたモノヴィッツ（アウシュヴィッツ第三収容所、Monowitz、ポーランド名モノビツェ、Monowice）があった。ここには解放直前に一万四〇〇〇人が収容されていた。これは正式には労働収容所（Arbeitslager）で、収容者たちは近くの工場で働かされていた。現在収容所を思わせるものは、十字路に整備された道路やトーチカ跡を除いてほとんど残っていない。ただ、近隣の工場地区は今も残っていて広大な産業地区となっている（Stenning et al., 2008）。

これら三つの収容所以外にも町の郊外には四五のサブキャンプが散在していて、収容者は農作業、養鶏、魚の養殖などの活動を通じて、アウシュヴィッツで働くおよそ八〇〇〇人のSS（ヒトラーの親衛隊、Schutzstaffel）の食料生産に携わっていた（図2）。

図1　アウシュヴィッツの中心街を望む（筆者撮影）



地図1　一九四四年夏のアウシュヴィッツ（出典：中谷二〇一一：二二〇―二二頁）

ヨーロッパのユダヤ人たちは、ひとつの貨車に数百人が押し込まれ、長時間かけて収容所へと移送された。収容所の荷役ホーム（Ramp）に着くと、貨車の入り口が開けられ、移送中に死んだユダヤ人の遺体が運びおろされる。さらに自力で歩けない者が殺害され、歩けても労働に適さないとみなされた老人、女性、子どもたち、病弱な者はそのままガス室へと誘導され、遺体は隣接する焼却炉に運ばれ焼かれた。アウシュヴィッツでは、貨車から降ろされて直接ガス室に送られたユダヤ人は四人に三人の割合だった。

収容所では、ユダヤ人、ソビエト兵の捕虜、ポーランド人の政治犯[4]、シンティ・ロマ（ジプシー）などが収容され、組織的に殺害されていった。その数については、諸説あるが博物館では、およそ一一〇万人が犠牲となったとみなしている[3]。このうち、非ユダヤ人は一〇万人だった。ちなみに、ヨーロッパ全域ではおよそ六〇〇万人のユダヤ人が虐殺されている。

一九四五年一月末に、ソ連軍の侵攻によって収容所が解放される。ソ連軍との戦闘を避けるため、この直前に、五万人の人びとがドイツ本国へと移動を強いられた。この移動は、後に「死のマーチ」と名づけられ、多くの被害者が生むことになった。収容所に残されていたのは、行軍に適さないとみなされた人びとで、その数はおよそ七〇〇〇人であった。

世界遺産

ここでアウシュヴィッツで出会った修道女マリー・オサリヴァン（七〇代、後述）の語りを紹介しよう。

アウシュヴィッツは、人骨を燃やした後の灰がそこかしこに層をなしている。だからここは聖なる土地ということができる。わたしたちは灰の上を歩いているのよ。（中略）人間を焼いた灰は、表面のすぐ下に積もっている。モグラっていう小動物がいるでしょう。これが土を掘り返すと、今でも土と

図2　アウシュヴィッツ郊外の元サブキャンプ（筆者撮影）

一緒に人骨の小片が外に出てくる。春になると野花が咲きみだれ、この地は綺麗な花で覆われる。そしてビルケナウには鹿の群れが住んでいる。ここには美しい生の矛盾が認められるの（二〇一四年一一月のインタビューより）。

かつてビルケナウ（第二収容所）では四台ある焼却炉がフル稼働して毎日、数百の死体を焼いていた。それらの煙突から大量の灰が降りそそいでいた。死体を焼くにおいも耐えられなかったと言われている。まるで工場か何かのようにユダヤ人の死を大量かつ迅速に「生産」したのである。人間の死を人間の死たらしめているような喪の作業がそこには認められていなかった。特定の、神話化された人種（アーリア人種）の純粋性を守るため、他者を排除し殺害するという優生思想に加え、大量かつ迅速に死を生産するという効率性においても、ホロコーストは近代の所産だと言える。したがって、過